

母を亡くして感じた事



姫路ひまわりの会
都留 さん

一母の経過 父の手紙より一

母は平成9年の夏頃、右の胸にしこりがあることを父や私に話した。しかし、しこりを見せてくれなかった。その時、皆で母に受診するよう、何度も勧めたが、母は受診しなかった。母は「受診したら、手術になる。手術したら、他の場所に腫瘍が飛んで、寿命が短くなる。どうせ死ぬんやったら、手術はしない。」とガンとして受診しようとはしなかった。それは間違っていると何度も説明したが、母は聞き入れてくれなかった。

平成11年になって、壊死化した腫瘍から出血し始め、自分では手に負えなくなり、母はやっと受診した。平成11年2月17日に最初の手術となった。6月、日帰り手術、9月16日、3回目の手術となった。平成12年1月25日の手術で腫瘍が取り切れず、父にだけ、余命1年と宣告された。父は動揺して、手術後、母に会わずに帰った。後で母は、父に文句を言ったそうだ。でも、その時、父は涙が止まらず、困り果て、帰ってしまった。私は、その時は仕事を休めず、後日、父からその事を聞いた。3月29日に母は退院した。退院後、母には放射線療法と化学療法が始まった。父は週4回の仕事をしていたが、母の毎週の受診は父が送り迎えをしてくれた。だが、母は父に気兼ねしているようだった。私は同じ年の平成12年3月末に退職した。そして、私も週2回の母の病院への送り迎えと、週1回電気の民間療法と、2週間に1回、氷上の施設に入所している母の実母(88才)の見舞いの送迎を手伝った。

秋頃から、小さい腫瘍が少しずつ増え、触れると痛み、ガーゼや三角巾で保護した。平成13年1月から腫瘍から出血し始め、ガーゼ交換の記載が目立つようになる。その頃、母は父に「(父の両親の)法事をせなあかん、」と話したそうだ。3月上旬から、母は氷上への実母の見舞いに同行しなくなる。母の右手の腫れが出始め、腫瘍からの出血も増えてくる。ガーゼ交換も介助が必要になってくる。私は日中、実家で過ごすようになる。4月29日、父の両親の法事。母は、遠方から来訪してくれた親戚へ感謝し、ねぎらい、不自由な体で法事に参加した。母のできる精一杯の事だった。5月になって右手の腫れがひどくなり、右指がかすかに動く程度となり、日常生活の介助も必要になってくる。



6月になると、右腕の痛みが強くなり、起き上がりにも介助が必要になってくる。中旬から、私も実家に泊まって介助する。

父は少し耳が遠いのと、今思えば、弱っていく母を見ているのが辛いせいもあったのか、母と余り話そうとせず、つっけんどんだった。母は大きな声を出す体力が無く、すぐ諦めて、沈んでいた。そんな二人をみているのも、辛く、つい父に、もっと母に配慮するように声をかけた。7月に入り、右腕や胸全体に広がった腫瘍の痛みが強くなり、26日姫路医療センターに入院する。8月下旬、マットにしみるまでの出血があり、30日、個室へ転室する。10月1日、モルヒネの持続皮下注射開始。再三の発熱、嘔吐を繰り返す。本人の希望する寿司や果物、父の釣りたての煮魚の差し入れをする。19日より、毎日出血多量。26日から絶食。10月31日、首振り「イエス、ノー」は答えるが、言葉はほとんど無し。11月3日、言葉にならないが、話そうとする。自分の葬式の段取りを心配している様子で連絡の順番を説明する。酸素マスク使用。11月5日夜中から呻吟、稀に発語あり。6日午前8時20分死亡。



—母を亡くして感じた事—

母が亡くなってから、父の落ち込み様は、私をびっくりさせた。あんなにつっけんどんだったのに、どうしてそんなに落ち込むのか、そんなに落ち込むぐらいなら、もっと母に優しくして欲しかった。娘の正直な気持ちだった。

父が「妻の最期の状態が辛かった。」と涙するのを見て、あの父の不機嫌さは弱っていく母を見ているのが辛かったことに、気が付いた。父も、母に配慮するゆとりがなかった。でも、私も父に配慮するゆとりがなかった。

私が働き始めた頃、先輩看護師から、「辛い事、悲しい事は慣れるから。」と言われていた。確かに汚い事、嫌な事は慣れて苦痛に感じる事が減った。しかし、急変や臨終の場面では、胸が絞られるような痛さをよく感じていた。患者さんとの別れの淋しさであったり、患者家族の悲嘆は、その都度鮮烈で、慣れる事がなかった。患者さんの家族の中には、激しい悲しみを表して、看護師が他の闘病中の患者さんに悟られないよう配慮しても、対応に苦慮する家族もおられた。若い命が消える時、本当に辛かった。

でも、出会った人達すべてが私にとってお手本であったり、反面教師だった。



急変が多かった分、いつも後悔はしないようにしたいと優先順位を考えて、すべき仕事をこなしていた。母の看病をしながら、同じように思っていた。母の徐々に悪くなっていく様子は、一つ一つの状態が看取ってきた患者さんと重なることもよくあった。母の体に起こっているサインを見ながら、いつも残された時間を推しはかっていた。そして、自分の辛さを悟られまいと振る舞ってきた。

母の最期の時は、とても母と思えなくて、患者さんを見ているようで、現実とかけ離れた感じがした。自分の悲しみに不感症の感じがするし、悲しいのに、悲しさを表現するのを止めてしまう自分がいる感じがする、でも、悲しみが津波のように噴き出してくることがある。



2度目の入院か3度目の入院か忘れたが、私が母の入浴介助をしている時、ポツリと「看護師さんって大変な仕事やなあ」と母が言ったことがある。私は傷を濡らさないようにするのと、風那をひかないように手早くするのに注意していて、「私は14年も看護師してきているのに、今更何を言っているのだろう。」とあって、「何を今更！」と言ったと思う。

就職してから、結婚するまで、私が仕事の愚痴をこぼしたとき、母はいつも「あんたが選んだ仕事やろ。どの仕事でもしんどいことはある。」と注意されていた。今回文章にしている時、ふと、このことを思い出した、「前の日に何があったのだろう。なんでそんな事を言ったのだろう。あの時、聞いていてあげたら良かったのに。」私は、母から「看護師さんって大変な仕事やなあ」と言われた時、正直、ショックだった。今まで仕事の話をして、「しんどいのは皆一緒！」と言われ続けていた。「今まで看護師の仕事をもっと軽くみていたのだろうか？仕事の話もしてきたのに。所詮、自分の身に振りかからなければわからないのか。」とあって、母の言葉をきいた時、悲しかった。でも、今回初めて、あの日の前日に、何があったのか、と気になった。「もっと聞いていれば良かった。」と思った。

—最後に—

平成14年11月、母の1周忌が済んでから、約4年間精神科で働いた。最初に働いていた病院では、救急、内科、神経内科で14年間働いた。そこでは、水分制限が厳しかったが、精神科では水中毒で10リットル以上の飲水をして痙攣を起こす患者さんがいて、最初はかなり戸惑った。でも、精神科では精神科



の大変さがあり、また、一般科とは違うやりがいも知った。しかし、腰を痛め退職した。主人の希望もあり、現在は働いていない。精神科で働いたお陰で、ひまわりの会の大切さを知ることができた。

「体験を自分の言葉で表現する」ということは、たくさんの作業が伴う。まず、自分の中で体験を言語化、文章化し、事柄や感情を整理する。そして、以前の感情を呼び起こし、文章化することで発散や浄化がされる。そして、大切なのは、体験を共有し合う場所があることであり、いろんな意見を聞くことで、違う視点からも物事を見られるようになることである。

最後に、父がひまわりの会に参加したのは、母が亡くなる半年前の、平成13年5月19日のいちごの会に母と二人で参加して、ひまわりの会の存在を教えて頂いたからだった。本当に一期一会の出会いからだった。

看護師だった都留さんの、お母さんの闘病の記録と、ナースとしての自分とのやりとりです。お父さんの苦悩も大きかったんですね。

「ひまわりの会」は身近な、大切な人を失った方々の語らいの会、「いちごの会」は乳がん患者の会で、いずれもしらさぎビル3階のシャポーホールで例会を開いております。 ⊕

姫路ひまわりの会へのお誘い



姫路ひまわりの会は、大切な家族や友達を失った悲しみの中にある人達が集い、辛い胸のうちを語り合う「わかちあいの会」を開いています。

同じ体験をした方々と話す事で、自分がひとりぼっちでない事に気づきます。あなたの心の痛みを感じる人があなたの側にいます。

例会は

毎月第2日曜日の午後2時～4時

場所は、シャポーホール（しらさぎビル3F）で開催しております。

お問い合わせ

だいたい循環器クリニック

TEL 079-222-6789

FAX 079-222-6785

